

学 位 論 文 要 旨

研究題目 (注：欧文の場合は、括弧書きで和文も記入すること)

Prevalence of Gastric Motility Disorders in Patients with Functional Dyspepsia
(機能性ディスぺシア患者における胃運動機能障害の頻度)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻 器官・代謝制御系

消化管疾患学 (指導教授 三輪 洋人)

氏 名 浅野 晴紀

【背景と目的】

機能性ディスぺシア (Functional dyspepsia: FD) とは器質的疾患がないにもかかわらず、上腹部症状が慢性的に続いている疾患である。その病態の主な要因一つとして胃運動機能異常が挙げられ、アジアにおける FD は食後愁訴症候群 (PDS; postprandial distress syndrome) が多いと報告されている。本研究では、日本人 PDS 患者 94 名を対象に、胃シンチグラフィを用いて胃運動機能 (胃貯留能と胃排出能) を測定し、日本人 FD における胃運動機能障害の頻度と上腹部症状との関連を明らかにするために本研究を行った。

【対象と方法】

Rome III 分類で規定された 94 名の PDS 患者に対しても胃シンチグラフィを行い胃運動機能 (胃排出能、胃貯留能) の測定を行い、10 項目の消化器症状 (上腹部痛、上腹部不快感、上腹部膨満感、食後膨満感、早期満腹感、悪心、嘔吐、食欲不振、げっぷ、胸やけ) について 0-3 点の 4 段階で自己記入して頂き、胃運動機能異常と消化器症状の関連を比較検討した。対照群として、上腹部症状のない健常人 40 名を対照群として本研究に用いた。本臨床試験は兵庫医科大学の倫理審査委員会に申請し承認されている (承認番号 536)。

【結果】

健常人の平均値 \pm 2SD を正常値とし、胃貯留能障害は 18.5%以下、胃排出遅延は 82.4 分以上、胃排出促進は 23.6 分以下と規定した。94 名の PDS 患者 (男性 29 名 女性 65 名 平均年齢 54.3 \pm 17.3) において、胃貯留能障害は 14.9% (14/94)、胃排出遅延は 10.6% (10/94) で認められ、胃排出が促進した症例は認められなかった。胃貯留能障害と胃排出遅延を同時に認める患者は認めず、全体では 25.5% (24/94) に何らかの胃運動機能障害が認められた。

胃貯留能障害、胃排出遅延の有無で 10 項目の症状の強さに関して比較をおこなったが、全ての項目において統計学的な差は認めなかった。

【結語】

本研究は日本人 FD 患者、とくに PDS 患者を対象に胃シンチグラフィ検査を用いた胃運動機能異常の頻度と消化器症状との関連に関して検討し、日本人 FD 患者、特に PDS 患者の約 25% で胃運動機能異常を認めたが、消化器症状との関連は認めなかった。本研究は多数のアジア人において、胃シンチグラフィという日常生活条件下に近い状況で胃運動機能や消化器症状の評価を行ったという点において意義があると考えられる。しかし、消化器症状と胃運動機能との直接的な関連を評価することは難しく、今後更なる検討が必要と考えられた。